



TITLE:

京大広報 No. 277

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 277. 京大広報 1984, 277: 541-550

ISSUE DATE:

1984-09-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209408>

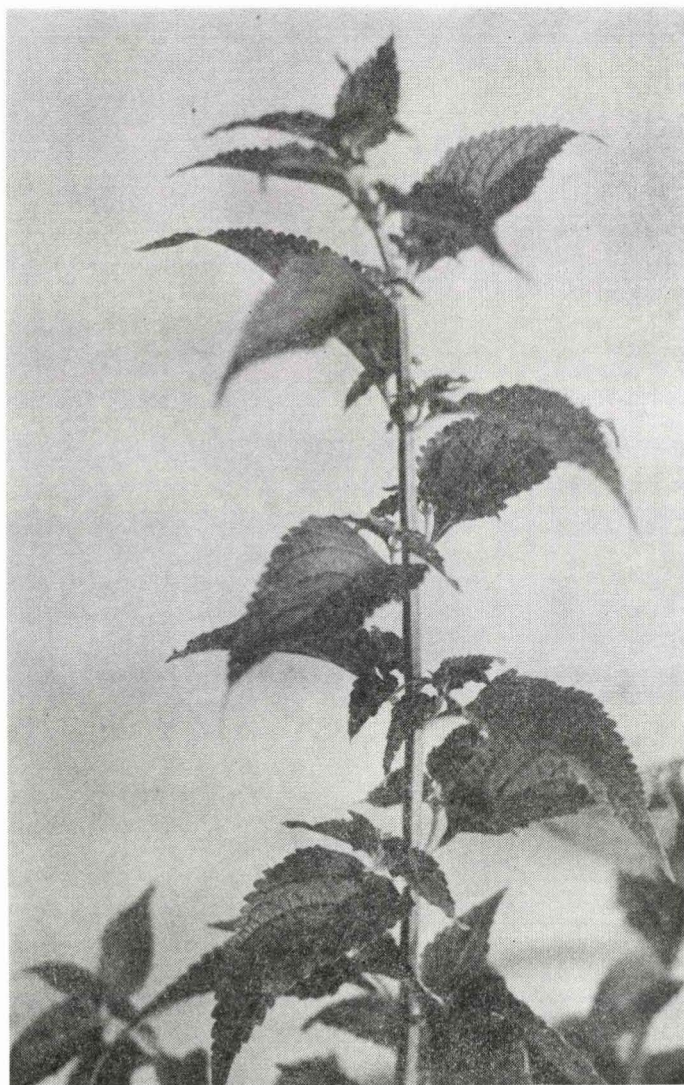
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 277

京都大学広報委員会



ヒキオコシ（延命草，シソ科ヤマハッカ属）

—関連記事本文 547 ページ—

目 次

昭和59年度京都大学市民講座

「自然と生命」…………… 542

7月2日の搜索…………… 542

「高等研究所」の構想に関する答申… 543

公開講座

工学部「工学と生活」…………… 545

農学部「農業簿記・

農業経営講習会」…………… 545

数理解析研究所「数学入門」…………… 546

人文科学研究所「混沌と秩序」…………… 546

理学部「高等学校教育関係者の

ための現代数学展望」…………… 546

農学部・木材研究所

「木材の科学」…………… 546

<紹介>

化学研究所

抗癌医薬開発研究部門…………… 547

計 報…………… 548

日 誌…………… 549

<随想>

昔と今——あれ、これ、想う

名誉教授 山内 邦臣…………… 550

＜大学の動き＞

昭和59年度京都大学市民講座

「自然と生命」

本学では、来る10月20日、27日、11月10日の各土曜日に広く市民を対象とする「京都大学市民講座」を開催する。

本講座は、財団法人京大会館楽友会の協力の下に、昭和54年以来毎年開かれているもので、昨年度に引き続き「自然と生命」を共通テーマに、総合大学の特色を生かして学問の諸領域にわたる講義が行われる。

○受講定員 330名 受講料 1,500円。

○申込方法 往復はがきに住所、氏名、年齢、職業、電話番号を記入（返信用には郵便番号、あと名を記入）のうえ、9月29日（土）までに庶務部庶務課学務掛（内線2041）へ。

○会場 農学部 W100講義室。

○日程

第1日 10月20日（土） 13:00～16:30	開講あいさつ	総 長 沢 田 敏 男
	自然と子ども	教育学部 助教授 藤 本 浩 之 輔
	ホルモンと健康	医学部 教 授 井 村 裕 夫
第2日 10月27日（土） 13:00～16:30	心臓病とコンピュータ	工学部 教 授 桑 原 道 義
	草・人・自然	農学部 教 授 植 木 邦 和
第3日 11月10日（土） 13:00～16:30	酵 素 の 合 成 — 生命合成への一里塚 —	薬学部 教 授 矢 島 治 明
	生 死 の 問 題	人文科学研究所 教 授 柳 田 聖 山
	閉講あいさつ	農学部長 半 田 良 一

7月2日の搜索

7月2日（月）、警察による学内の搜索が行われた。

この日の搜索は、6月30日（土）の「集会集団行進及び集団示威運動に関する京都市条例」違反並びに「道路交通法」違反被疑事件について突然

行われたもので、本学関係者立会いの上、午前7時5分頃から始まり、同7時40分終了した。

搜索は、文学部学生会ボックス等2か所について行われ、ヘルメット、ビラ等が押収された。

「高等研究所」の構想に関する答申

今回、大学院審議会制規等専門委員会より、「高等研究所」の構想について答申を受け、7月10日開催の大学院審議会において審議の結果、承認されました。学術研究に対するこの構想の重要性に鑑み、ここに答申を掲載して、広く学内にお知らせします。

この答申は、高度の学術研究において国際的に寄与し、また高度の研究者の育成にも関与する研究機関の構想を検討するよう、昭和54年1月、制規等専門委員会に総長が行った諮問に対する検討結果であります。同委員会は、わが国及び諸外国の研究機関について調査を行ったのち、本学大学院の整備充実とも密接な関連をもつ構想として、今回の答申を作成されたのであります。

研究教育におけるこのような重要な基本的構想を策定された制規等専門委員会委員各位の長年にわたるご努力に対して、ここに深甚な感謝の意を表します。

昭和59年9月11日

総長 沢 田 敏 男

昭和59年6月22日

大学院審議会議長

沢 田 敏 男 殿

大学院審議会制規等専門委員会

委員長 吉 沢 尚 明

「高等研究所」の構想（答申）

I 検討の経緯及び方針

(1) 本委員会は、昭和54年1月23日の大学院審議会において総長から、「高度の学術研究を行い、また高度の研究者の育成にも関与する機関」の構想を検討するよう、諮問を受けた。この構想に関する本委員会の審議経過を同年末に報告したが、今回の答申は、その後の検討に基づいて補完したものである。

(2) 本委員会では、この問題の検討に当たって、わが国及び外国の研究機関についての資料を調査するとともに、医学等の分野における海外調査の

結果をも参考にした。

また、学術審議会の答申「学術振興に関する当面の基本的な施策について」（第三次答申、昭和48年10月31日）及び「学術研究体制の改善のための基本的施策について」（昭和59年2月6日）をも参考した。

(3) 本委員会は、この機関について、設置の意義及び設置する場合の形態等について検討した。諮問ではこの機関は、基本的にはわが国が国際的に寄与しうる高度の研究機関とすることが要望されている。本答申は、このための理想的な機関を目標としているので、その実現のためには、多くの点について、現行の制度、法規等の改正の必要性を検討しなければならない。本答申ではそのうちの若干を、[1]、[2]等として指摘したが、具体案作成の段階では、これらの問題を解決することが必要となるであろう。

(4) 本答申において、米国の The Institute for Advanced Study（いわゆるプリンストンの高等研究所）のように専任研究者を持つ研究所の構想を提示する。本委員会の審議の中では、分野の性格及び機関の型について他の構想も検討され、それらが有用であることも指摘されたが、ここに述べる型が最も基本的なものであると考えられるので、それに限定して答申する。

(5) 研究所において研究される分野は、直接の応用を目指さない基礎的なものとすることが、本委員会の検討において強調された。これはプリンストンの高等研究所の設立と趣旨を同じくするものである（usefulness of useless knowledge）。

なお、研究分野の選定は、本委員会の本来の審議事項の範囲を超えらるゝと考えられるので、これは別の方法によって行われることが望ましい。

II 「高等研究所」について

1. 研究所の目的と型

本委員会が諮問を受けて検討したのは、わが国が国際的に寄与しうる高度の研究機関の構想である。この目的に合致する研究機関の型については、学術審議会の昭和48年の答申における次の分類を参考にした。

(イ) 特定目的研究所

(ロ) 大規模施設・設備を中心とする研究所

(b) 高等研究所というべきもの

(c) 総合研究所というべきもの

このうちでは(b)の型が比較的、本答申の目的に近いと考えられる。これは学術審議会の同答申において次のように説明されている。

「卓越した研究者たちに自由な思索と学問的交流のための特別の場を提供する趣旨の研究機関である。研究領域も研究主題もあらかじめ特定せず、研究者が代れば変ることとなる。この型のものは、規模はかなり小さくてもよく、また、その数も極めて少数であってよいが、真に国際的に開かれたものでなければならない。」

この種の研究所のうちにも更にいくつかの類型が考えられるが、それらはいずれも多くの方野で、意義があるものと考えられる。典型的なものにプリンストンの高等研究所及びアスペン研究所等があるが、その他、ドイツ連邦共和国のいわゆるマックス・プランク研究所などもこの種の研究機関とみることができるであろう。具体的構想のためにはこれらの研究機関の歴史と実態を参考とするのが適当であろう。

[1] わが国の既存の大学附置研究所と国立大学共同利用機関は、四つの型のいずれかと、ある程度は対応しているが、これらの既存の研究所(単数又は複数)が、発展の方向として本答申に述べる構想を取り上げる場合があれば、本答申の内容の実現は当然容易になるであろう。

2. 研究分野の性格

(1) 上述の型の研究所にとっては、その分野又は研究課題は、必要に応じて(例えば数年を期間として)変ってゆくことは適当である。

(2) したがって研究分野は次のような性格を併せ持つ分野のうちから選ぶのが適当である。

(i) 研究の強力な推進が要望される基礎的分野。

(ii) 国際的な共同研究に適した分野。

(iii) 大型施設・設備をこの研究所に置くことを必要としない分野。したがって典型的なものとしては次のいずれかの分野である：

(i) 理論的分野。

(ii) 実験的であっても大型施設・設備を必要としないような分野。

(iv) 大型施設・設備を必要とする実験分野であっても、他の大学、研究機関等で実験が実施できるような分野。

(3) 上述のような分野を複数組み合わせることによって大きな意義が生じることが考えられる。なお、分野の選定については、例えば次のようないくつかの一般的観点を考慮しなければならない。

(i) 研究所の目的とする分野を具体的に特定するか否か。

(iv) 研究分野の先端性を考慮するか否か。

3. 人 員

(1) 研究所の性格から、研究者については国際性と流動性が重要である。

(2) 研究者の流動性のためには、例えば次のような構成が考えられる。

(i) 研究所長

(ii) 比較的少数の専任研究者

(iii) 比較的多数の客員研究者

なお、これに加えて、post-doctoral fellow の(2年間程度の)研修の場とすることが考えられる。

(3) 所長と専任研究者の選考は、この種の研究所の価値と意義を左右する決定的な重要性のあることである。研究課題の決定、運営の基本方針等に対して、所長と専任研究者の見識が反映されることが必要である。このために所長と専任研究者は、国籍、年齢等にかかわらずに選ばれることが重要である。プリンストンの高等研究所の構想が、A. Einsteinを迎えることで具体化したのは典型的な例であろう。

(4) 研究活動の国際性については、この研究所は国際的な学術研究に大きな寄与をすべきものであり、その一つの形態として上述の(2)、(ii)の研究者を積極的に(例えば半数程度を)外国人とすることは適当であろう。

[2] 優れた外国人研究者の招致のために給与、宿舍等の適切な処遇が必要である。

[3] 研究所を国立とする場合、外国人を所長に

選ぶ場合には、関連する法の改正等を検討しなければならない。

〔4〕大学附置とする場合も、停年制を（所長と専任研究者に対して）機械的に適用することは適当でない。

〔5〕外国の高等研究所で、設立当時には極めて高度の活動を行っていたものが、自己資金の不足によって流動研究員を自主的に選ぶことが少なくなったために、機能が低下したといわれるものがある。このようなことを避けるためにも、運営のための十分な予算を確保することが必要である。

4. 機構について

（1）研究所の目的を遂行するためには、研究の自主性が保たれることは基本的要件である。

（2）設置者等に関しては、次の種類が考えられる。

（イ）国立大学共同利用機関

（ロ）本学附置の全国共同利用研究所

（ハ）特殊法人

これらには、それぞれの得失があり、諸般の条件と併せて検討することが必要である。また機

構、運営上の制約はできるだけ少なくすることが望ましい。

〔6〕（イ）と（ロ）は教育公務員特例法が適用される場合であるが、これらと異なる種類の研究所とする場合にも、例えば特別立法等によって保護されることも検討してよいであろう。

〔7〕（ロ）の場合には、本学の管理機構からはなるべく独立したものとし、しかも研究上は本学と密接な関係を持つような形態が望ましい。例えば本学の部局とせず、“併設”等の適当な形態を検討することが望ましい。

〔8〕所長及び専任研究者が研究と学術的指導に専念しうるような管理運営機構とすることは、重要な検討課題である。

5. 大学院との関連

この研究所は、その目的・性格上、大学院と直接の制度上の連関を持つものとはしない方が適当である。

なお、3.（2）に述べたように、post-doctoral fellow の研修を一つの機能とすることが考えられる。

<部局の動き>

— 公開講座 —

工 学 部 「工学と生活」

工学部では、6月16日から7月7日までの毎週土曜日の午後1時から6時まで、工学部大会議室において、公開講座を開催した。

テーマは、「工学と生活」である。この公開講座は、一般市民を対象に工学部の教授、助教授が各自の研究分野における工学の進歩と生活とのかかわり合いをわかりやすく解説することを主眼としたものであり、160余名が受講した。講義題目、講師は次のとおりであった。

わが国の鉄鋼業の現状と技術革新 小門 純一
金属はどこまで強くなるか 田村 今男

コンピュータによる自動翻訳	長尾 眞
ロボットの話	花房 秀郎
長大トンネルの話	足立 紀尚
人工膜のはたらき—人工腎臓	
から太陽エネルギー変換まで—	清水 剛夫
電気を作る、送る、貯める	
—超電導の電力機器への応用—	仁田 旦三
超高層ビルの話	金多 潔
	（工学部）

農 学 部

「農業簿記・農業経営講習会」

農学部・農業簿記研究施設では、7月15日から20日までの間、農学部講義室において公開講座「第48回農業簿記・農業経営講習会」を開催した。

この講習会は、農業簿記とそれに基づく農業経営の分析・診断・計画に関する理論と実務の普及を目的としたものである。講習会には農業改良普及員、高校教員、府県・各種団体職員、農家など北海道から沖縄まで40道府県の全国各地から102名が参加し、連日午前9時から午後5時まで受講した。講義科目、講師は次のとおりであった。

農家経済簿記および農家経済の分析・診断

菊地 泰次・頼 平・桂 利夫

農業経営複式簿記

阿部 亮耳・稲本 志良

農業投資および資金の計画・管理・分析

亀谷 是・稲本 志良

地域農業および農業経営の分析・診断・計画

西村 博行・吉田 忠・熊谷 宏

(農学部)

数理解析研究所

数 学 入 門

数理解析研究所では、7月24日から8月2日までの間(午後1時15分から5時まで。7月28日、29日を除く)、数理解析研究所4階大講演室において、「数学入門公開講座」を開催した。

この公開講座は、ある程度数学の素養のある社会人、中学・高校教員、学生等を対象に、専門的題材をわかりやすく解説しようとするものであり、講座には約120名が受講した。講義題目、講師は次のとおりであった。

ゲームの理論をめぐる

一松 信

メビウスの問題をめぐって

松浦 重武

結び目と特異点

廣中 平祐

多次元立方体を切る (教養部) 岩井 齊良

(数理解析研究所)

人文科学研究所

「混沌と秩序」

人文科学研究所では恒例の夏期公開講座を8月1日から3日間(午前9時から12時まで)本館において開催した。

35回目を数える本年度の講座は、「混沌と秩序」を共通テーマとし、日本部・東方部・西洋部各2名の講師により次の通り行われた。連日約

110名の受講者があり盛況裡に終了した。

家康・秀忠・家光

藤井 譲治

世界一周

吉田 光邦

李陵 — その絶望と転身 —

富谷 至

二つの時間

小南 一郎

言葉にみる類別の論理

細川 弘明

“群衆”をめぐる

富永 茂樹

(人文科学研究所)

理 学 部

「高等学校教育関係者のための現代数学展望」

理学部 数学教室では、8月2日から8日まで(日曜を除く6日間、午後1時から5時15分まで)標記の公開講座を開催した。数学の発展が数学教育にも大きな影響を与えていることに鑑み、この公開講座は、高等学校教育関係者に、数学の発展について、いくらかの展望を与えることを目的としている。本年は6年目で、約60名が受講した。講義題目と講師は次のとおりであった。

ベアノ曲線はどんな関数方程式を

みたしているのか?

山口 昌哉

数の概念の一般化とトポロジー

河野 明

行列と行列式

永田 雅宜

函数と群との関係

吉沢 尚明

(理学部)

農学部・木材研究所

「木 材 の 科 学」

農学部林産工学教室と木材研究所と合同して8月23日から3日間(午前9時から午後5時まで)の公開講座を開催した。

この講座は主として中学校技術・家庭科の教員を対象とし、実験室の雰囲気の中で木材研究の成果と展望との若干にふれてもらうことを意図したものであり、一部理科教員、小学校及び高等学校の教員をまじえ、19名の受講者を受け入れた。

講座のスケジュールは、初日を合同講義にあって、二日目及び三日目を各研究室における分属セミナーにあてた。それぞれのテーマ及び分担者は次のとおりであった。

合同講義(8月23日)

木材の組織—光顕から電顕まで

(農 学 部) 原 田 浩

肉眼による樹種の識別

(木材研究所) 林 昭三

木材の化学—成分と化学的利用

(農 学 部) 横 田 徳郎

木材の物理的性質—材料としての機能

(木材研究所) 則 元 京

新しい木質材料 映画「上手に使える小径材」

(木材研究所) 佐々木 光

分属セミナー (8月24日, 25日)

木材における超ミクロの世界

木材構造学研究室

顕微鏡下の木材組織

木材生物部門

木材のプラスチック化

木材加工材料科学研究室

紙の調整とその性質

林産化学研究室

リグニンによる木材の化学的識別

リグニン化学部門

木材の物理的性質と加工

木材物理部門

木材加工機械の騒音

林産機械学研究室

木材の工学的再生—木質材料

木質材料部門

(農学部・木材研究所)

＜ 紹 介 ＞

化学研究所

抗癌医薬開発研究部門

抗癌医薬開発研究部門は、旧生理活性研究部門を基礎として昭和58年4月1日に大部門制をとって発足した。

本研究部門のルーツをたどると、遠くサルバルサンの製造研究から出発して、本研究所においてその後“化学療法剤に関する研究”という研究課題のもとに研究がつづけられてきた。昭和39年省令により部門制が実施されるに及び、上述のように生理活性研究部門となり、昨年再び衣替えを行って大部門に生れかわったのである。このような歴史的背景のもとに、本研究部門は有機化学を基盤として、その化学療法への寄与を目ざして発展してきた。

一方、わが国における癌死亡率は1950年頃から徐々に上昇し、1981年には脳卒中死亡率を抜いて第1位を占めるに至った。癌撲滅が現下の急務であることはいうまでもない。癌の治療法としては、外科的な手術による癌組織の摘出、コバルト60のγ線照射による治療、温熱療法などが知られるが、さらに化学療法が極めて重要な役割を果たしていることを特筆すべきであろう。

抗癌医薬開発研究部門に生れかわったが、その基盤は有機化学であり、有機化学のサイドから抗癌医薬開発へのアプローチを行おうというのが本研究部門の目標である。従来の日本の各大学や研究所に設置されている癌関係の諸施設、諸研究室

は臨床に偏っており、根本の抗癌医薬開発を目的とするような施設が極めて少なく、この方面はむしろ企業の研究機関にゆだねられているかの観がある。このような時に、本研究部門が化学研究所に設置されたことは非常に大きい意義をもつと思う。すなわち化学研究所は、化学の非常に広いスペクトルにわたる各専門領域の専門家を集めており、生物有機化学の研究には正にうってつけの機関であるということができる。関連研究部門の緊密な協力のもとに、緊急を要するこの重要課題に取り組みつつある。また、この大部門には客員の教授1、助教授1の定員がついている。癌化学療法におけるわが国のすぐれた研究者を招き協力していただいている。

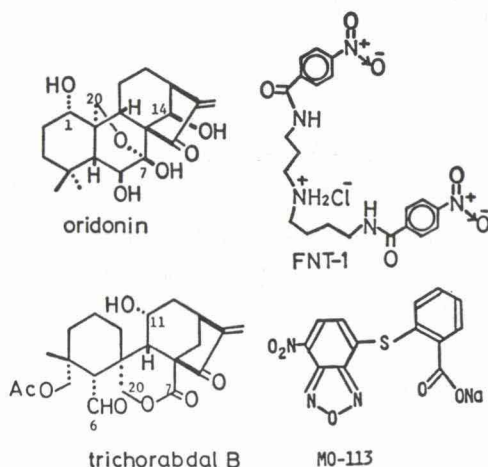
ところで、現在臨床に使用されている抗癌剤には天然物あるいはその修飾化合物と純合成化合物とが含まれる。本研究部門でも、これら両領域の有機化合物について研究を進めている。

まず、天然物の関係としては、生理活性研究部門当時から続行しているシソ科ヤマハッカ属植物の抗癌活性ジテルペノイドの研究がある。特にヒキオコシ(表紙写真)、クロバナヒキオコシは別名延命草という名でセンブリの代用として昔から苦味健胃薬として用いられてきたが、これらの植物の葉に含まれるジテルペン成分の中にかなり強力な抗癌活性を示すものが発見された。それらは共通して分子中に或る部分構造をもっており、それが活性中心であり癌細胞中のSH酵素あるいは補酵素のアルキル化剤となり、酵素活性を阻害することにより抗癌活性を現わすことを明らかにし

た。最近さらに、より強い抗癌活性を示す複数の活性中心を分子内にもつジテルペン類が見出された(図左側)。さらに化学修飾による活性増強にも成功した。これらの知見をもとにより強力な抗癌性化合物を設計、合成して開発したい。

次に、純合成化合物として先ず放射線制癌における低酸素性細胞増感剤の設計と合成がある。コバルト60での照射は制癌に有効であるが、低酸素性の細胞には無効であり、酸素の代用となる細胞増感剤の開発が熱望されている。本研究部門では、この開発のため種々の有機分子を設計し合成した(図右側)。従来の試供品よりも活性の強い新分子を開発したが、さらに毒性の少い、水溶性の大きい分子の開発をめざしている。さらに癌細胞のDNAの二重らせんに intercalate し、直接抗癌性をそなえた分子でしかも低酸素性細胞増感剤ともなり得るような分子の設計と合成を行いつつある。

以上のように抗癌剤開発をめざす先端的研究は勿論のこと、それらの基礎となるべき反応、合成



延命草の抗腫瘍活性ジテルペン (oridonin, trichorabdal B) (左) 及び低酸素性新細胞増感剤 (FNT-1, MO-113) (右)

法、不斉合成法の開発研究をも積極的に実施している。

(化学研究所)

訃報

佐野 正男 (医学部事務官)

7月2日逝去, 62歳。昭和40年から医学部(庶務掛)勤務。

川田 周雄 (本学名誉教授)

7月3日逝去, 73歳。本学文学部卒業。昭和37年本学教養部教授就任, 45年退官。専門は英文学。

松尾 新一郎 (本学名誉教授・工学博士)

7月4日逝去, 65歳。本学工学部卒業。昭和36年本学工学部教授就任, 57年退官。専門は土質力学。

上尾 八郎 (医学部附属病院

検査部臨床検査技師長)

7月5日逝去, 59歳。昭和17年医学部附属病院勤務, 51年同院検査部臨床検査技師長。同47年本学永年勤続者表彰(30年勤続)を受ける。

佐野 宗一 (本学名誉教授・京都大学農学博士)

7月10日逝去, 75歳。本学農学部卒業。昭和37年本学農学部附属演習林教授就任, 47年退官。その間農学部附属演習林長(42年~44年)を併任。同55年勲三等瑞宝章受章。専門は森林法律学, 林業経営学。

秋月 康夫 (本学名誉教授・理学博士)

7月11日逝去, 81歳。本学理学部卒業。昭和23年本学理学部教授就任, 35年本学退職。同48年勲二等旭日重光章受章。専門は代数学。

初田 美智雄 (学生部厚生課事務官)

7月29日逝去, 51歳。昭和49年から学生部厚生課勤務。

中村 健児 (本学名誉教授・理学博士)

7月30日逝去, 80歳。本学理学部卒業。昭和24年本学理学部教授就任, 42年退官。その間評議員(32年~34年)を併任。同49年勲三等旭日中綬章受章。専門は動物系統遺伝学。

高安 國世 (本学名誉教授)

7月30日逝去, 70歳。本学文学部卒業。昭和38年本学教養部教授就任, 51年退官。専門はドイツ文学。

上坂 章次 (本学名誉教授・農学博士)

7月31日逝去, 75歳。東京帝国大学農学部卒業。昭和25年本学農学部教授就任, 47年退官。同55年勲二等瑞宝章受章。専門は畜産学。

松本 信一（本学名誉教授・医学博士）

8月1日逝去，99歳。本学京都医科大学卒業。大正8年本学医学部教授就任，昭和19年退官。その間医学部長（昭和13年～15年）を併任。昭和24年日本学士院会員。同41年文化功労者に選ばれる。同51年勲一等瑞宝章受章。専門は皮膚病学・微生物学。

後町 幸雄（防災研究所

附属防災科学資料センター助教授）

8月19日逝去，51歳。本学大学院理学研究科修士課程修了。昭和44年本学防災研究所助教授就任。専門は気象学。

大八木 邦雄（施設部企画課事務官）

9月3日逝去，60歳。昭和52年から施設部企画課（埋蔵文化財研究センター）勤務。

上坂 一郎（本学名誉教授・医学博士）

9月3日逝去，71歳。本学医学部卒業。昭和42年本学結核研究所（結核胸部疾患研究所）教授就任，52年退官。その間結核胸部疾患研究所長（47年～51年）を併任。専門は細菌学。

近藤 泰夫（本学名誉教授・工学博士）

9月4日逝去，89歳。本学工科大学卒業。昭和3年本学工学部教授就任，33年退官。その間評議員（16年～18年）を併任。同41年勲二等旭日重光章受章。専門は建築構造学，コンクリート工学。

豊崎 稔（本学名誉教授・経済学博士）

9月13日逝去，82歳。東北帝国大学法文学部卒業。昭和21年本学経済学部教授，40年退官。その間評議員（23年～27年，29年～31年及び37年～39年），経済学部長（24年～26年）を歴任。専門は経済政策。

日 誌

（1984年6月1日～8月31日）

6月2日 ドイツ連邦共和国 Berlin 市 Hermann Oxfort 司法長官来学，総長及び関係教官と懇談

4日 総長，大韓民国慶北大学との学術交流に関する協定の締結及び高等教育・研究機関の視察のため，同国を訪問（8日まで）

6日 同和問題委員会

ク アメリカ合衆国 Kent 州立大学 Michael Schwartz 学長外1名来学，国際交流委員会委員長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学

ク ヌネスコ出版物展示会（12日まで）

11日 連合王国 Science and Engineering Research Council 理工学視察団（Salford 大学 T. R. Crossley 教授外4名）来学，総長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学

13日 総長，大学院生協議会と会見

16日 工学部公開講座「工学と生活」第1日（6月23日，6月30日，7月7日）

18日 創立87周年記念式

ク 名誉教授懇談会

ク 創立記念行事「音楽会」

ク 公開シンポジウム「青年における聖と俗」（学生懇話室，保健管理センター）

19日 発明審議委員会

20日 国際交流委員会

20日 オーストラリア Western Australian 工科大学 Donald W. Watts 学長来学，工学部長と懇談及び学内施設見学

23日 理学部玉城嘉十郎教授記念公開学術講演会

25日 創立記念行事「学術講演会」

29日 附属図書館商議會

7月6日 環境保全委員会

10日 評議会

ク 大学院審議會

15日 農学部附属農業簿記研究施設公開講座「農業簿記・農業経営講習会」（20日まで）

16日 大韓民国慶北大学校 徐元燮総長外2名来学，総長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学

18日 国際交流委員会

23日 アメリカ合衆国 Wisconsin 大学 Milwaukee 校 Frank E. Horton 学長来学，工学部長及び関係教官と懇談並びに学内施設見学

24日 学位授与式

ク 数理解析研究所数学入門公開講座（8月2日まで）

8月1日 人文科学研究所夏期公開講座「混沌と秩序」（3日まで）

2日 理学部数学教室公開講座「高等学校教育関係者のための現代数学展望」（8日まで）

23日 農学部林産工学教室，木材研究所公開講座「木材の科学」（25日まで）

